

発展途上国の子どもを理解し共感する 家庭科保育領域の教材開発

—絵本製作学習への組み込みの可能性—

柴 静子 一ノ瀬孝恵 高橋美与子 日浦美智代
佐藤 敦子 高田 宏

はじめに

現行の学習指導要領は、1996（平成8）年7月の中央教育審議会第一次答申を踏まえ、変化の激しい社会を担う子供達に必要な力として「生きる力」の育成を主唱してきた。その後10年を経た今日、現行学習指導要領の改訂が目前に迫っている。その背景について経緯を記すと次の通りである。

戦後、約60年間に渡り教育の理念と方向性を示してきた教育基本法（1947年3月公布）が改訂され、改正教育基本法が2006年12月に公布された。そこで2007年2月に、第4期中央教育審議会が今後の教育理念等について審議を始め、早くも3月には、「教育基本法の改正を受けて緊急に必要とされる教育制度の改正について」という答申を出した。これを受けて同年6月には、各学校段階の目的・目標規定を改めた「学校教育法の一部を改正する法律」が国会で成立・公布された。これらによって明示された教育の基本理念は、先述の中央教育審議会答申（1996年）で謳われた「生きる力」の育成にほかならない、といわれている。

上記の2つを受けて、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（第4期）は、2007年11月に「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」を公表した。「審議のまとめ」においては、少子高齢社会の到来や環境問題の深刻化などから、小学校から高等学校に至るまでの家庭科教育の重要性がより強く謳われている。とりわけ、家庭科の学習指導要領改善の基本方針として、「少子高齢化や家庭の機能が十分に果たされていないといった状況に対応し、家族と家庭に関する教育と子育て理解のための体験や高齢者との交流を重視する¹⁾」ことがあげられている。

さて、以上の基本方針と軌を同一にして、私どもは平成16～18年度の3ヵ年にわたり、乳幼児とのふれあい体験学習の深化と効率化に向けて学部・附属学校共同研究を進展させてきた。平成18年度には、ふれあい体験学習の一環として実施されている絵本の製作指導に焦点を当て、「指導理念や方法の改善により、一層の学習効果をもたらされる」という仮説を立て、授業実践を行い、それを実証した。具体的には、附属福山高等学校でのふれあい実体験（ももやま保育園訪問）と附属高等学校でのふれあい擬似体験学習の中で、0歳児向けの紙絵本（統制群）と布絵本（実験群）の製作を行わせ、長所と隘路を明らかにすることによって、この領域の学習の質的向上に寄与することができ、また幾つかの課題を見出すことができた。

それらの課題の一つは、子どもの文化として絵本がもつ普遍的価値をどのように生徒に理解させるか、ということであった。そこで平成19年度は、絵本製作学習の一環として、戦後日本の子ども文化と現在の発展途上国の子ども文化とを繋いで考えさせるという新しい内容を導入することによって、絵本の普遍的価値への理解を促すことが可能になるという仮説を立てた。

カンボジアが端的な例だが、途上国の子どもたちは、保育や幼児教育の機会を十分に与えられておらず、また与えられているとしても、保育指導の理論・方法の欠如や保育環境上の問題から、成長発達を保證する質の高い教育を受けていない。このような事情は日本の敗戦直後との状況と極めて類似している。日本のかつての経験と途上国の現在を繋ぐ学習を絵本製作学習の中に位置づけようとする場合、どのように内容を構成すれば、日本文化の利点を理解し、また途上国の人々に共感して援助の気持ちをもつ将来の国際人の育成に

寄与することができるのであろうか。このような視角から、二つの附属高等学校において、絵本を通して日本の文化と発展途上国の子どもを理解する授業を構築・実践し、検証したので報告する。

I 附属高等学校での絵本製作学習の実際と効果

1 指導のねらい

昨年度までの授業実践から、保育領域の学習の一環として手作り絵本を製作することで、絵本が乳幼児の発達に与える影響を捉えさせることが可能となり、さらには、生徒の人間的な感情の醸成と自らの成長に関する理解の深化を図ることができることが明らかになった。

平成19年度は、質の高い絵本は日本の子どもたちのみならず、世界中の子どもたちによい影響を与えること、特に敗戦直後の日本と現在の途上国（カンボジア）を取りあげて、子どもたちへの絵本の効力について映像資料を用いて理解させる授業構築を行った。また、今回は、絵本作りの楽しさを絵本作家のストーリーや絵から学ばせることとし、ぬりえ絵本を用いて製作活動を行った。

この授業は、広島大学附属高等学校の2年2組（男子18名、女子22名）を対象に、同高校教諭一ノ瀬孝恵が行なった。実施期間は平成19（2007）年10月9日～12月11日であった。

2 指導計画（全10時間＋課外）

- 第1次：子どもの誕生と成長・発達…… 2時間
- 第2次：子どもの遊びと児童文化財…… 2時間
- 第3次：絵本の効用と絵本製作……… 5時間＋課外
- 第4次：子どもの人権と福祉……… 1時間

3 指導過程

指導時間全10時間のうち、ここでは、国際理解の視点を組み込んだ、第3次「絵本の効用と絵本の製作」について、授業の概要を示す。

（1）「絵本の効用と絵本の製作」の目標

- ①第二次世界大戦後の日本の絵本の普及活動を知り、絵本の効用を考える。
- ②カンボジアの子どもたちの実情を知り、絵本が子どもたちに与える影響を考える。
- ③今、私たちにできることは何かを考える。
- ④班で協力してぬり絵絵本を製作することができる。

（2）学習の流れ

表1は、第3次1、2時間目の学習内容を示したものである。

まず、絵本の思い出を数名の生徒に発表させ、絵本の効用について考えさせた。続いて、既成絵本「さっちゃんのまほうのて」、「もりたろうさんのじどうしゃ」、「のろまなローラー」などを紹介しながら、絵本の領域を知らせた。

次に、第二次世界大戦直後の日本の子どもたちの保育環境と、現在の途上国の子どもたちの保育環境が類似しており、成長発達を保障する質の高い教育をうけていないという事情を生徒たちに知らせるために、日本の絵本の歴史を簡単に知らせ、次いで第二次世界大戦後の広島図書²⁾の児童文化発展への貢献を理解させた。さらに昭和25年に製作・公開された教育映画「ぼくらのゆめ」³⁾を視聴させることで、戦後、日本の復興を子どもたちに託すべく質の高い教育を受けさせるため、学級文庫を作り、移動図書館を駆使し読み聞かせなどが行われていたことを理解させた。この授業は11月27日に1時間で実施された。

映画「ぼくらのゆめ」の内容は表1の通りである。

表1 教育映画「ぼくらのゆめ」の内容

・製作	ぎんのすず児童映画協会
・企画	松井富一
・脚本	クラタ・フミンド
・共同監督	田坂具隆、クラタ・フミンド
・（登場人物）	A吉、B子、C助

A吉の章

桜の季節に、教室では生徒たちが学級新聞を印刷している。A吉が最初に書いた記事は、「学級文庫をつくりたい」ということであった。そのころの子どもは、俗悪な雑誌や紙芝居を好み、あげくには雑誌を万引きする子どもも少なくなかった。A吉は学級新聞に次のように書いた。「しかし、何冊かの僅かな本を大事に読んで、人にも貸し、つづいて仲間の手から手へ…ボロボロになって帰って来ると、今後は、それをていねいに修理して、また繰返し、繰返し読んでいる子どももいるのです。僕たちは、もっと、たくさんの本がほしいのです。偉大な人たちの伝記や、世界の少年少女が必ず読むという古典の童話と薫り高い詩の名作がほしいのです。それに親しむことは、ぼくら日本の少年少女が世界の人々と共に生きることですし、永遠の人類の生命を感じることなのですから…そうだ、クラスに本棚をつくろう。各自の本を持ち寄り、学校や父兄にも買っていただき、寄附もお願いしよう。どうしても学級文庫をつくろう。そう考えて、早速そのことをクラス新聞に書いたのです。」

この結果、次々に学級文庫ができて、楽しく利用され始めたが、A吉は、書籍の数が限られていることを残念に思った。しばらくして、A吉の手にB子の原稿が届けられた。そこには移動図書バスのことが書かれていた。

B子の章

B子は年に何回か海に面した田舎の家に帰るが、それは移動図書館がやってくる日に決めていた。

海の見える広場で、子供たちが大勢、遊びながら待っている。大型バスがやってきた。鮮やかな色に塗られた車体、胴に「ぎんのすず移動図書館」と書いている。バスに子どもたちが群れる。バスの両壁はブック・ケースで、おびたしい少年少女向きの書籍や雑誌が収納されている。車内はリーディング・ルーム。子供達がバスの内外で、本を音読したり、黙読している。女性の係員が絵本の読み聞かせをした後に、男性の係員が童歌を指導している。「これは、『ぎんのすず』という雑誌の社会事業なので、読物に恵まれない町や農村の子供達のために半日、一日と、このような移動図書館を開設して、自由に本を読ませて、ときには歌もおしえ、童話も話して下さるそうです。同じようなバスが何台もあって、それぞれ、町から村、村から町へと、日本中を廻っているのだと話してくださいました。…思いがけない図書バスの訪問でした。楽しく読み、明るいお話を聞いて、集まった子供たちにとっては、本当に夢のような子供の天国に遊ぶ半日でした。」というナレーションが入る。

B子が学級新聞に書いた移動バスについての記事は、「移動図書館はアメリカでもイギリスでも非常に活躍していて、定期的に巡回しながら、人々に良い本の選び方を指導し、いろいろのお世話をしているのだそうです。日本にも、もっと、もっとたくさんの図書バスが出来て、東の町にも、西の町にも、定期にやって来ていただけるということになったら、どんなにステキでしょう。」と結ばれている。

C助の章

この章では、昭和25年に西宮で開催された「アメリカ博覧会」会場における広島図書出展の「児童図書館」が紹介されている。A吉が書いた記事がナレーションとして、次のように述べられる。

「それより、もっとステキなほくの夢は、学校に学級文庫、田舎に図書バス、そうして、町に一つの児童図書館ということです。児童専門の図書館は、日本にまだないようですが、先日、ほくは、アメリカ博覧会でそれを見たのです。大阪の叔父さんの家へ行ったときでした。ほくは、いま、そのことをクラス新聞の原稿に書いているのです。移動図書館の記事に負けないような特ダネにするつもりです。」

A吉は弟のC助と一緒に博覧会場に着き、アメリカの素晴らしい施設と膨大な本と教科書類がそっくり持ち込まれたような児童図書館に驚嘆した。色とりどりの児童向アメリカ原書の明るく美しい挿絵、貸し出しの手順、写真展ホールなど、A吉は夢中になったが、その最中にC助が迷子になりA吉は博覧会場を捜し廻る。その道々でアメリカ博覧会場が紹介される。C助は図書館の書庫で、おびたしく取り散らした本の中にうずくまって、あの絵、この絵を夢中で見ている。A吉、やっとC助を連れ出し、図書室に戻る。

アメリカの理科と社会科のたくさんの教科書が翻訳されて販売されている。A吉はその中の一冊を買う。ナレーションは次のように語る。「ここだけは、基礎科学の教科書や社会科の本を翻訳した日本版ですが、挿画は原本そのままに刷り上がっていて、開いて見ると、ちっともかたくなるしくなく、美しく正確な写真や絵が、とても興味をそそるのです。文も、じょうずにおもしろく書かれているので、きっと一気に

読んでしまうでしょう。」

A吉は、アメリカ博覧会の児童図書館見学記を学級新聞に掲載した。その記事は次のように結ばれた。「あれも、これも、ほくたちには知りたくてたまらないことがいっぱいです。だから、もっと、もっと、本がほしいのです。何でも教えてくれる本、昔のことで、外国のことで、きけば、なんでも話してくれる本。まるで、生きた人間のように答えてくれる本を、もっと、もっと、ほしいのです。夢よ実を結べ、ほくたち、日本の子供の生活を、楽しみながら勉強できる、美しく明るい、健康なものに早くしたいのです。そして正しい世界の公民になるのです。」

季節はめぐり、すでに葉桜。少年少女の明るい希望の瞳が未来を予測しているかのようである。

教育映画「ほくらのゆめ」は、敗戦後の日本の再建を子どもに託す、大人の夢を描いたものでもあった。荒廃した国土に子どもの文化の花を咲かせ、明るい未来を拓いてやりたいと願う心は、内戦で多くのいのちが奪われ、国民生活が破壊されて、未だ十分に復興していないカンボジアにおいても同じである。そこで、「ほくらのゆめ」の視聴に引き続き、カンボジアの子どもたちの現状を紹介した映像資料「輝く瞳が待っている」(NHK福岡「新アジア発見カンボジア～輝く瞳が待っている」)を視聴させた。カンボジアの実情を知らせ、戦後日本と同じように、子どもたちに絵本が望まれ、その力が大きく発揮されていることを共感的に理解させたいと考えた。

その後、カンボジア、タイで子どもたちが安心して暮らせる環境づくりと女性の自立を考えた活動を行っている、特定非営利活動法人「幼い難民を考える会(CYR)」および、在日カンボジア人と日本人が中心になって設立した「CAPSEA」を紹介した。CRYの取り組みの中に、子どもたちの成長に配慮した遊具・教材の製作・使用というものがあり、その遊具である「人形」や「布ボール」づくりの一部を私たちが手伝うボランティアを募集していることも紹介した。その際、出来上がった「人形」や「布ボール」の実物を提示したところ、生徒たちは非常に興味深い眼差しを向けていた。また、CAPSEAは移動図書館の形で小学校などを巡回し、海外の絵本を翻訳して絵本の読み聞かせをしていることを知らせた。そして、今自分にできることは何かを考えさせた。表2はこの時間の学習過程である。

以上のように絵本の力を理解させた後、世界的な絵本作家であるエリック・カール氏の絵本を紹介し、途上国の子どもたちに与えたい「ぬりえ絵本」を班毎に製作することを知らせた。取り上げた絵本は、アメリカで市販されている次の4冊であり、原著に忠実に絵の輪郭が描かれ、原文が書かれている。

表2 学習過程 (附属高等学校の実践)

学習内容	学習過程	指導上の留意点 (評価)
< 導入 >	<ul style="list-style-type: none"> 児童文化財としての絵本について学習することを 	
< 展開 > ・絵本の思い出 ・絵本の効用 ・絵本の領域 ・日本の絵本の歴史 ・「ぼくらのゆめ」視聴 ・カンボジアの子どもたち ・VTR「輝く瞳が待っている」 ・私たちにできること	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の思い出を発表する 題名, 大好きだった本, 印象に残っている本 絵本にはどんなメッセージ性 (絵本の効用) があるかを考える 絵本の領域を知る 赤ちゃん絵本, ものの絵本, 遊びの絵本, 民話の絵本, 科学絵本, 写真絵本など 日本の絵本の歴史を知る 平安時代から第二次世界大戦まで 第二次世界大戦後の広島図書出版の貢献を知る 映画「ぼくらのゆめ」を視聴する 視聴メモをとる, 感想を書く 世界の子どもたちについて, カンボジアの子どもたちから考える カンボジアの実情を知る→貧困の消滅, 撲滅が最重要課題 カンボジアバットマンバンの様子を視聴する 視聴メモをとる, 感想を書く 絵本が子どもに与える影響を考える 今私たちにできることは何かを考える 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート配布 生徒発表 (理由) 物事の認識, 観察眼, 情操, 言語能力, 読書の基礎など 絵本を紹介する 日本の絵本の歴史 広島図書出版の貢献 映画「ぼくらのゆめ」学級文庫を作る, 移動図書館, 日本の復興を子どもたちに託す カンボジアの内戦 (1970年から1991年), 知識人層の処刑, 乳幼児死亡率 VTR「輝く瞳が待っている」(NHK番組) 質のよい絵本や物語は明るくやさしい気持ちにさせる CAPSEA, CYRの紹介: 布人形, ボールを提示する エリック・カールのぬりえ絵本の下絵配布
< まとめ >	<ul style="list-style-type: none"> ぬりえによる絵本作りを行なうことを知る ぬりえ絵本の下絵を受け取り, 各班で担当するページを決定する 	

はらぺこあおむし:

VERY HUNGRY CATERPILLAR

くもさんおへんじどうしたの:

VERY BUSY SPIDER

だんまりこおろぎ: VERY QUIET CRICKET

さびしがりのほたる: VERY LONELY FIREFLY

5人1組で8つの班に分かれ, 各自どの部分を担当するかを話し合わせた。その際, ぬりえ絵本製作を行うにあたり, 布を貼るなどの工夫することを条件とした。(11月27日 1時間)

その後, ぬりえ絵本の製作に取りかかり, 5時間で各自の担当ページを仕上げた。(12月4日, 11日, 各2時間) 各班の作品は, 1月に入って発表させた。

II 附属高等学校での授業実践の効果

戦後日本の教育経験と現在のカンボジアの子ども文化に関する課題をつなぐ内容をぬりえ絵本製作学習に組み込んだことにより, 以下のような効果が見られた。

(1) 学習を楽しく進めることができた

学習後のアンケート調査では, 絵本製作学習が「大変楽しかった」と答えたのは, 34.2%, 「楽しかった」は57.9%, 「普通だった」は5.3%, 「あまり楽しくなかった」は0%, 「楽しくなかった」は2.6%であり, 9割の生徒がこの学習を楽しいものと受け止めていたことが示された。

(2) 絵本製作前後では気持ちの変化が顕著になった

生徒の感想文に記された、絵本製作前後の気持ちの変化を次に示す。

「最初は自分で一から作るのではなく、できた物から作るので、少し不満はあったが、その中でも自分らしさを出せたので良かった。」「絵本は子ども向けで幼稚なものだと思ったが、作る中で作者なりの工夫や見せ方が複雑で洗練されているのに気づき、改めて、良くできたと思った。」「製作前は大変そうだとしか思っていなかったが、製作するうちにどんどん楽しくなってもっとやりたいと思うようになった。子どもの気持ちに戻った気がした。」「絵本製作がこれほどに楽しいものとは思っていなかった。読むのも楽しいけれど、私たちが作ったものを見て楽しんでくれる人がいたら、もっとうれしいと思う。」「以前は、漠然とどうやったら楽しい絵本が作れるのか、と考えていた。作っていくうちに、子どもの立場に立って色や素材を考えられるようになり、子どもがよろこんでくれたらいいな、と思うようになった。機会があったらぜひ、子どもにも見てもらいたい。」「製作前はとても楽しみだった。やっている途中は、1枚の絵を完成させるのが思ったより大変で絵本製作の大変さを知った。終わって全てのページを見たときは達成感でいっぱいだった。」「絵本は簡単な絵だし、作るのはとても易しいと思っていたけど、実際は簡単に見える絵や短い文の中にたくさんの意味が隠されていることが分かり、とても深いものだと思った。」「ただの色塗りだと思ったけど、いろんな素材を使ったりして作る側も楽しい本になったと思う。絵本は子どもの考えをたくさん作る影響力のあるものだと思った。」「いろいろな素材を使って作るのは予想以上に楽しかった。子どもが見て楽しいと思える絵本はなるべく多くの素材を使って見ても楽しめ、触っても楽しめるというものだと思った。淡い色を使ったほうが良いと思った。」「製作する前から、楽しそうだと思っていた。作り終えると、自分のページにすごく愛着がわき、みんなで作ったこの本をカンボジアの子どもたちに送りたいと思った。」

以上のように、名作絵本のぬりえに取り組みせることにより、簡単かつ短時間で自作絵本を完成させること、並びに絵本のもつ古今東西を問わない普遍的価値を理解させることを目標として、絵本製作学習の高度化を図った。生徒の感想文には、絵本というものの本質を捉えた記述が多く、さらには最後の文章が示すように、絵本を希求しているカンボジアの子どもたちに思いを馳せながら製作を進めた生徒も少なからずいた。ぬりえ絵本の製作とカンボジアでの図書館活動を

通して、国の将来を担う子どもの育成には絵本が大きな力を発揮するということを生徒たちは学んだようである。

(3) 日本とカンボジアにおける絵本の役割が分かった

「日本とカンボジアの子どもにとって、絵本の役割はどのように違うか」という質問に関して、生徒の多数は次の見解をもった。

「私たちににとっては楽しむためのものであり、カンボジアの子どもたちにとっては文字を学べる教材となる。」「日本では学力よりも感受性を意識されるが、カンボジアでは学校に通えない子どもが大勢いて絵本はそういう子どもたちにとっての教科書の役割を果たしている。」「私たちににとっては想像力などを養うもので、カンボジアにとっては学校へ行くためのきっかけ作りとなる。」「日本の子どもたちにとっては遊びの一つ。カンボジアの子どもにとっては、厳しい環境の中での数少ない娯楽。」「カンボジアの子どもたちにとって、生きる糧である。」「カンボジアの子どもたちにとっては外の世界を見るためにすごく大切なもの。」「私たちににとっては当たり前のようにあるものだけれど、カンボジアの子どもたちにとっては癒しであったり、夢である。」「日本では遊びの一つだが、カンボジアでは子どもたちの希望である。」

以上のように、多くの生徒は、日本では日常的に触れている絵本がカンボジアにおいては学校教育の不足を補う大切な文化財として取り扱われていることや、子どもたちの明日に生きる希望を生むものであることなどを理解した。今回の試みのように、復興途上の国にあって絵本を希求する子どもの姿を知らせることは、絵本のもつ普遍的な役割について共感をもって理解させるための方法として適切であると思われる。

(4) 途上国の子どもたちへの援助の意欲が高まった

カンボジアに対して援助も含めて今後どのようにしたいかという問いには、次のように答える生徒が多かった。

「実際にカンボジアに行って子どもたちにふれあって、絵本を読んであげたり、読んでもらったりしたい。」「絵本をもっと楽しめるようにカンボジアに文字を教えるための学校を開きたい。」「手作り絵本は愛情もたくさん伝わってくるし、カンボジアのような貧しい国でも作れるので、私が作った本を届けてあげたい。」「カンボジアに絵本を寄附したい。」「カンボジアの子どもたちに本の読み聞かせをしてあげたい。」「日本の絵本に、その国の言語で書いたシールを貼り、プレゼントするという活動を続けたい。」

以上のように、カンボジアに対する共感が深まり、国際援助を草の根レベルで行うことへの意欲が高まったことにより、この度の絵本製作学習は、国際理解教育としても大きな可能性をもつことが示された。

Ⅲ 附属福山高等学校での絵本製作学習の実際と効果

1 附属福山高等学校での絵本製作学習

附属福山高等学校では、家庭基礎2単位の中で絵本の製作と近接の保育園への訪問を中心に置いた保育の授業を行っている。平成19年度は、乳幼児の特徴や、生まれたときにすでに身につけている、他者と関わりを持つ能力について学習した後、絵本の授業に入った。対象年齢別に分かれて、それぞれのグループが布絵本と紙絵本を製作し、応答的保育やオノマトペを取り入れてどのように読み聞かせができるのかを考えさせた。その後、保育園での読み聞かせを行った。そのときの生徒の感想には次のようなものがあり、園児たちの絵本への反応に対する嬉しい気持ちがよく表現されている。

「絵本の内容が結構単純で、子どもたちが反応してくれるか心配だったけど、保育園で本を見せた途端にいっぱい反応してくれたので良かった。」「幼児が一生懸命読み聞かせを聞いてくれたり、笑ってくれたり、反応してくれたりしたのが、すごく嬉しくて、絵本を作ってよかったなあと思った。」「保育園に着いたときは、緊張していて自分から近づけなかったけど、絵本を読むと幼児から近寄ってきてくれたし、自分からも話しかけられるようになった。幼児とのコミュニケーションに絵本はとても役立つと思った。」

絵本製作の授業の中では、様々な絵本を見て絵本の魅力に触れさせ、さらに乳幼児とのコミュニケーションを広げ深める絵本の効果について考えさせた。

絵本製作と保育園訪問を終えた後、まとめの授業として、「絵本のパワー」という内容で、2つの視点から授業を構成し、実践した。

視点1は、「絵本の読み聞かせによって、乳幼児と一緒に過ごす時間が増え、会話が盛んになることの再確認」ということであった。先述の感想のように、ほとんどの生徒が実際の読み聞かせを通して「絵本は乳幼児とのコミュニケーションにとっても役に立つ」ということを実感として理解することができているので、この点を再確認させることとした。

視点2は、「決して豊かとは言えない様々な環境の中で生活している子どもたちにとっての絵本は、未来を担う子どもを育てるうえで、とても重要な役割を果

たしている」ということであった。

この点について考えさせるために、まず昭和25年に製作された教育映画「ほくらのゆめ」を取りあげて、戦後の、本が不足していた時代の小学生（A吉）のことば「あれも、これも、ほくたちには知りたくてたまらないことが一杯です。だから、もっと、もっと、本が欲しいのです。何でも教えてくれる本。昔のことも、外国のことも、聞けば、何でも話してくれる本。まるで、生きた人間のように答えてくれる本を、もっと、もっと、欲しいのです。夢よ実を結べ、ほくたち、日本の子どもの生活を、楽しみながら勉強できる、美しくて明るい、健康なものに早くしたいのです。」という思いを伝えた。このことばや映像を通して、絵本は敗戦後の子どもの学びたいという知識欲を満たし、夢を実現させるための大切な手段であった、ということの説明した。

次に世界の様々な状況の中で懸命に生きている子どもたちの一例としてカンボジアの子どもたちを取り上げた。カンボジアの子どもたちの様子を示している写真集「あなたの大切なものは何ですか」では、内戦の様子を絵にして、平和の大切さを訴えている子どもや、地雷を踏んで足を失ったにも拘わらず明るい笑顔を見せている子どもたちの様子を見ることができている。ここでは、絵本は内戦や日々の生活で疲れた子どもたちの心を癒す働きをしているということ、学校に行けない子どもたちの学習への意欲を喚起するということを説明した。

加えて、自分との関わりという点で、「世界を変えるお金の使い方」の中から300円で1m²分の地雷をなくすることができることや様々な援助活動について説明した。ここでは、自分たちにはどんな援助活動ができるのかを考えさせるだけではなく、世界で懸命に生きている子どもたちのことを日々の生活を送る中で想像しながら、自分たちの生き方を考えることができることをねらった。

一連の授業は、附属福山高等学校の1年生3クラスを対象に、同高校教諭高橋美与子が行なった。実施期間は平成19（2007）年9月6日～12月14日であった。

以下に、A組（男子22名、女子18名）を対象として、平成19（2007）年12月14日に1時間で実施した「絵本のパワー」についての学習指導の概要を記す。

2 単元名と単元設定の理由

「絵本のパワー」と題した授業は、24時間に及ぶ単元「コミュニケーション能力を高める保育の授業—絵本の製作・読み聞かせを取り入れて」の17時間目であ

った。

単元設定の理由は次の通りであった。

自分の思い通りにならない乳幼児を虐待してしまう親のニュースが日常的に報道されたり、自分の子どもにどう接していいかわからず困惑してしまう親が増えたりするなど、子育てのあり方が社会的問題になっている。その原因には様々なことが考えられるが、兄弟姉妹の少ない核家族の中で育ち、育児に関する知識を得る機会のないままにわが子が生まれて、初めて育児ということに直面するという状況もその原因の一つとしてあげられる。

このような現実の中で家庭科の保育の授業の果たす役割は大きい。そこでこの単元では、以下の点をねらいとして授業を進めていきたいと考えた。

①乳幼児は心身ともに未熟であるため、おとなと同じように考えて接すると、大変な病気や怪我につながるということから、乳幼児を世話するときに必要な心身の発達の特徴と衣食住の生活に関する留意点を理解させる。②人間形成の基礎となる重要な時期であり、愛情をたっぷり注いで育てることや自由に十分に遊ぶ時間や場所を設定することが大切であることを理解させる。③育児についての知識を伝えるだけでなく、できるだけじかに乳幼児とふれあう体験をさせたり育児のすばらしさや乳幼児の愛らしさをビデオで見せたりしながら、多感なこの時期に生命の大切さや、子育ての喜びを実感させる。④絵本の製作を通して、他者と関わりを持つとするとする乳幼児の能力に気づかせ、心身の発達には生まれたときからの家族とのコミュニケーションが欠かせないということ、絵本が親子のコミュニケーションを深めるための有効な手段になるということや、0歳からの読み聞かせの大切さを理解させる。自分たちが製作した絵本を乳幼児にどう読み聞かせると、より充実した時間になるのかを考え実践させることを通して、高校生において最近特に低下しているといわれるコミュニケーション能力の向上を図る。

さらに、戦後の日本やカンボジアの決して豊かとはいえない社会における子どもたちにとって、絵本はどのような役割もつのかといことについても学習を広げ、絵本の影響力に関する理解を深めさせたいと考えた。

2 単元計画 (全24時間)

- ①乳幼児の心身の発達 …………… 3時間
- ②絵本の製作 …………… 9時間
- ③保育園訪問 …………… 4時間
- ④絵本のパワー …………… 1時間 (本時)

⑤乳幼児の生活と世話 …………… 3時間

⑥幼児食の調理実習 …………… 4時間

3 本時の題材名とねらい及び学習過程

本授業の題材名は「絵本のパワー」とした。本時のねらいは次の通りであった。

- ①カンボジアの子どもたちにとっての絵本の役割を理解することを通して、世界の様々な状況の中で懸命に生きている子どもたちへ目を向ける。
- ②絵本が子どもの楽しみであったり、親子のコミュニケーションをとるための有効な手段になるためだけのものではなく、未来を担う子どもたちを育てていくためにも大きな役割を果たしていることを理解して、絵本の子どもたちへの影響力を再認識する。学習過程については、表3に記したとおりである。

IV 附属福山高等学校での授業実践の効果

(1) 「絵本のパワー」について理解を深めるという効果

本授業におけるワークシートや感想文を分析したところ、戦後日本のよき子ども文化樹立への希求と、カンボジアの同様の課題を繋ぐ内容を組み込んだ絵本製作学習によって、生徒は絵本のもつパワーについて、3つの視点から理解を深めたことが明らかになった。

一つは、乳幼児と絵本の関わりを客観視しているものである。第二は、これに自己の経験を加えるなどして主観的に理解したものである。第三は、絵本は世界の子どものにとって、普遍的な価値をもつことを理解しているものである。次にこれらの代表的な記述をあげてみる。

(i) 絵本と乳幼児との関わりを重視した記述

「絵本はただ内容を楽しむだけでなく、子どもの成長の中で大きな役割を果たしていることがよくわかった。授業を受ける前は、子どもは絵本を読むより、テレビを見たり遊んだりの方が好きだろうと思っていたけど、授業で色々絵本について学んだり実際に読み聞かせをして、子どもは絵本にすごく興味を持っていることがわかった。たくさん読み聞かせをして、その興味を伸ばしてあげることが大切だと思う。」「絵本には作者や読み聞かせる人の思いが詰まっているから、子どもたちは惹かれるのだと思う。ちょっとしたことばや絵でも、作者の気持ちがこもっていれば、大きなものを子どもに伝えられる。」「絵本を通して親子、友だちの関係が築けることが一番のパワーだ。また、子どもと心を通わせることができるすごさ、大切さがよくわかった。」という記述から、絵本には作者

表3 学習過程（附属福山高等学校の実践）

学習内容	学習過程	指導上の留意点（評価）
1. ももやま保育園の子どもたちと絵本（導入5分）	<p>(1) ももやま保育園での絵本の読み聞かせの感想を思い出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命聞いてくれたり、笑ってくれたりとても楽しんでくれたなど。 <p>(2) 子どもたちにとって、絵本や絵本の読み聞かせはどんな意味を持っていたのかを考え、ブックスタートの効果の1つである「親子一緒に時間が増え、親子の会話が盛んになる。」ということが実感できたことを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ももやま保育園の子どもたちの目の輝きや純粋な様子を思い出しているか。 ・行く前の予想と行った後の気づきをまとめさせることで、実感として感じ取ったことを明確にさせる。 ・ももやまの子どもたちは、自分たちが作った絵本からも色々なことを吸収してくれたことに気づかせる。
2. 戦後の日本の子どもたちと絵本	<p>(2) 戦後の日本の子どもたちの絵本への思い「もっともっと本が欲しい・・・」（映画「ぼくらのゆめ」）を試聴して、当時の子どもにとっての絵本の意義をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知りたいことを何でも教えてくれる本。 ・自分の夢を実現させるために大切な本。 	<ul style="list-style-type: none"> ・写真や映像を見せて、戦後の子どもたちの様子を理解させる。 ・情報過多の時代に生きる自分たちには欠けている知識欲の大切さに気づいているか。
3. 世界の子どもたちと絵本	<p>(3) 世界には様々な環境の中で懸命に生きている子どもたちがいることに気づく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発展途上の国で生活している、戦争をしている国で生活している、難民として生活している。 <p>(4) その中でカンボジアを取り上げ、子どもたちが大切に考えているもの（家族、国、平和など）を通して、彼らの生活環境の大変さを理解する。</p> <p>(5) 大変な環境の中で、懸命に生きている子どもたちにとっての絵本の意義について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦争や日々の生活で疲れた心を癒す。 ・学習したいという気持ちを育む。 ・唯一の大切な教材である。 <p>(6) 世界の子どもたちと自分たちの生活の関連に気づく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界を変えるお金の使い方について ・様々な援助活動について 	<ul style="list-style-type: none"> ・カンボジアの子どもたちの様子に関心を持って見ているか。 ・未来を担う子どもたちを育てていくという、大切な役割を絵本は果たしていることを押さえる。
4. 世界の子どもたちと絵本のパワー（まとめ10分）	<p>(7) 学習してきたことをもとにして、絵本のパワーについてと様々な環境の中で懸命に生きている世界の子どもたちについての自分の考えをまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の毎日の生活の中でも、目の前のことや自分の欲求のことだけ考えるのではなく、世界の子どもたちのことが想像できるような、寛容さや包容力を持って欲しいことを伝える。

の思いが込められており、乳幼児と周囲の人々とのコミュニケーションの良き手段になることが理解されている。

(ii) 絵本の力を自己との関わりから考えている記述

「絵本は今の私にとっては、あまり身近なものではなくなっていた。でも、まだ覚えている本がある。今でも覚えているのだから、そのとき絵本によってすごく刺激されたのだと思う。絵本は幼児にいろんな刺激を与えるので、すごくプラスなものだと思った。」、「学問への入り口ということが印象に残った。誰でも読むことで楽しむことができる。私も子どもが生まれたら、小さい頃から忙しくても絵本を読み聞かせる時間を持ちたい。」、「小さい頃や今でもなにげなく読んでいる絵本や本、そこから身に着けたことはきっと沢山あるのだと思うが、あまり意識したことはなかった。本や絵本は知識を得るものであり、子どもとのコミュニケーションもとれるもの。今まで無意識に読んでいたけど、本のあるありがたさを意識していくことは大切だと思う。」という記述から、絵本のもつ本質的な利点について、自己の体験と往還しながら理解を深めたことが分かる。

(iii) 絵本が時空を超えて普遍的な価値をもつことに気づいている記述

「絵本には、人の心を癒す力があると知り、それが世界共通であるということもわかった。絵本には人の心を暖かくしてくれるすごい力があるのだと気づいた。」、「私が思う絵本の役割の重さと戦後や世界の子どもたちにとっての絵本の重さはかなり違うものだと感じた。世界の子どもたちの心を潤してどこかの子どもたちにとってもなくてはならないものと思った。」、「絵本を読んでいる間は、日常の辛いことや嫌なことを忘れさせてくれるのだと思った。絵本はどんな国にもあり、どんな子どもにも笑顔をもたらしてくれると思う。いろんな生活をしている子どもたちを遅くさせるパワーがあると考えた。」、「絵本はどんな子どもにとっても、どの時代の子どものにとっても重要な意味を持っていることがわかった。昔は本が足りなくて、ある本ならなんでも読みたいという意欲があっていいと思った。絵本はただ単に知識や情報が入ってくるというだけではなく、人と人とのコミュニケーション手段にもなるので、積極意的に子どもに読み聞かせをすることが大切だとわかった。」という記述から、絵本が時空を超えた価値をもつものであることを理解していることが分かる。

以上のように、絵本のもつ力について生徒が認識を深めていったことが示され、この授業が高い効果を上げたことが窺われる。それでは次に、生徒は、様々な

環境の中で懸命に生きている途上国の子どもたちにどのような共感を抱いたのであろうか、この観点から授業の効果を知りたい。

(2) 途上国の子どもへの共感が深まるという効果

一連の授業の過程において、生徒は途上国の子どもたちに対して、次第に共感を深めていったことが感想文等から知ることができる。共感の深まりは、「世界の子どもたちの生活に目を向ける」ことから、「世界の子どもを知り、自分の生き方を振り返る」ことへ、さらには「世界の子どもたちに対して何ができるか」というところにまで及んでいることが窺われる。

(i) 世界の子どもたちの生活に目を向けている記述

「環境は違っても学ぶことが楽しいという気持ちは子どもにとって共通するものと思った。本がたったの1冊あるだけで、その子どもの宝になるのだろうし、癒しのオアシスみたいなものだと思う。くじけそうになっても本の中のことばを見て、立ち上げられるのだと思う。」、「日本は世界の中でも平和な国だから、私たち自身は何とも思っていないことでも他の国の子どもたちにとっては憧れるものも多い。先進国の技術発展も大切な事ではあるが、発展途上国などへのサポートも必要なことだと思う。子どもはもっと幸せであってほしいと思う。」という記述から、途上国の子どもたちへの共感的理解を深めていることが分かる。

(ii) 世界の子どもたちの状況を知ることから自分の生き方を振り返っている記述

「体が不自由になったり、生活が困難でも彼らの笑顔がなんであんなに輝いているのかと疑問に思った。私たちは便利な生活を送れるけれど、厳しい環境の中で生きている子どもたちの方が精神的に強いのだと思った。自分の生きる環境に拘わらず懸命に生きている姿を見て、みんな夢を持って生きていてカッコいいなあと思った。自分も負けられない。」、「地雷がまだまだ大量に埋まっている地域や戦争をしている地域など、生活するのが困難な子どもたちもいれば、自分たちのように安全にまた気持ちよく生活できる環境にいる子どもたちもいる。困難であっても自分の中に大切にしているものをしっかり持つことで、ちゃんと有意義に過ごせるものと思った。」、「自分より年の少ない子どもたちが、戦争に苦しんだり、兵士になって人を殺しているという事実は衝撃的だった。恵まれた環境で育てられ、世界の子どもたちに目を向けようとしないうちはまだ甘いと思った。」という記述から、途上国の子どもたちから生きることの厳しさを教えられ、自己の生き方を省察する機会を得たことが窺われる。

(iii) 世界の子どもたちに対して、自分は何ができるかを考え始めたことが示された記述

「地雷を踏んで足がなくなってしまった子どもがとても衝撃的だった。日本では考えられないような事が実際に世界で起こっているということや、自分が使っている少しのお金でたくさんの人が救えるということを中心に留めておきたいと思った。」「環境が様々でも、本が好きであるという気持ちは世界共通であると思う。また、純粋である部分も同じではないかと思う。世界の子どもたち全員が笑顔になれるよう、環境を整える必要があるのではないだろうか。」「物が豊かな日本に暮らしていると、世界の子どもがどの位貧しいのかというのを見当もつかないけど、だからこそ知ろうとすることは大切だと思う。100円あるからといってマックに行かないで、より多くの世界の中の貧しい国の子どもたちを助けてあげたいと思った。」「困難な状況の中で生きている子どもたちと裕福な子どもたちとはあまりにも差があり過ぎると思う。彼らの笑顔が眩しかった。その笑顔を守るために何ができるのか、今の状態ではよくわからないけれど、自分でできることはしたいと強く感じた。私の夢はジャーナリストになることなので、大人になって具体的に実行してみたいと思う。」「途上国の子どもたちは絵本を読む時間もゆっくり持てないし、ましてや字を読めない子どももいると思う。だからもっともっと本を読んで、世界を広げて欲しい。そのためには募金活動など援助活動に参加するべきだと思う。」という記述のように、途上国の子どもの貧しい生活や絵本に代表される文化財への希求を知ったことにより、自分に何ができるのかという、援助の具体的な方向を考えるに至ったことは、一連の授業の最大の効果であったといえよう。

3 授業効果のまとめ

これまでも乳幼児とのコミュニケーション手段としての絵本の効果にふれながら絵本製作の授業を行ってきたが、今年はさらに、世界の厳しい環境の中で生活している子どもたちにとって、絵本がどのような意味をもつかについて考えさせる内容を付け加えた。

今回の授業を通して、生徒たちは、まず、自分たちとは全く異なる厳しい環境の中で生活している子どもたちの現状を知り、そこで懸命に生き抜いている逞し

さや彼らへの絵本の影響力に感動し、自分の生き方を振り返るきっかけとしたり、自分にできることを考え始めた。将来、親やおとなになったとき、絵本を通して乳幼児とのコミュニケーションを楽しく行えるようになってほしい、ということのをねらいの一つとして始めた絵本製作授業であったが、今回は一段と内容がパワーアップされ、絵本のもつ時空を超えた普遍的価値について、生徒は深く理解するようになった。身の回りに留めず、世界の子どもたちに目を向けさせることで、国際的な視野と援助の心を培い、それをターンさせて、生徒の人生観や世界観についても省察させる機会を与えることができた。

おわりに

平成19年度は、広島大学の2つの附属高等学校において、「発展途上国の子どもを理解し共感する保育領域の教材開発」を行い、授業を実施してその効果を検証した。

従来のふれあい体験学習から飛躍して、視野を日本の戦後から途上国の現在に広げ、国家の再建が緊急とされている状況下において絵本を中心とした子ども文化の創造がいかに希求されるか、という視点を組み込んだ授業を行うことによって、日本の文化を知り、途上国を援助する心を有した国際人の育成に繋がるのみならず、自己の生き方を省察する機会を生徒に与えることになった。

なお、授業効果の測定に関して、今回は質的分析を行ったが、今後はアンケート調査等による量的把握も必要であると考えている。

注

- 1) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』, 2007, p. 101.
- 2) 1947年、松井富一により創設。雑誌『ぎんのすず』や教科書の発行など、戦後の児童文化の復興に寄与した。
- 3) 広島市立図書館所蔵映像。「ぎんのすず児童映画協会」が1950年に製作した。C I E教育映画に認定された。